

二ヶ領用水

二ヶ領用水は、川崎市のほぼ全域を流れ、江戸時代に小泉次太夫により長い歳月をかけて完成されたことから、別名 次太夫堀とも呼ばれています。神奈川県下で最も古い人工用水のひとつで現在の川崎の発展も、この二ヶ領用水があったからといえます。

二ヶ領本川

二ヶ領本川は、多摩川の上河原堰より農業用水・工業用水を主として取水し、川崎市の誕生から今日までの発展を支えたことから「川崎の育ての親」と呼ばれています。歴史的にも文化的にも由緒ある川であることから川崎の新しいシンボルとして再生することが強く望まれています。

川崎の歴史を語る川「二ヶ領用水・二ヶ領本川」

市内を400年にわたって流れ続ける二ヶ領用水は、徳川家康から用水奉行として命じられた小泉次太夫によって慶長2年に着手、完成したのは慶長16年のことでした。二ヶ領というのは、この用水が江戸時代、川崎領と稲毛領にまたがっていたことに由来します。この二ヶ領用水ができるまでの多摩川は、洪水を繰り返しては田畑を流す

荒々しい川でした。二ヶ領用水の完成により米の収穫量は飛躍的に伸びました。二ヶ領用水は、川崎の歴史を語るうえで、かけがえのない用水なのです。

●現状
二ヶ領用水は、これまで農業や工業に用水を提供する働きがメインでしたが、急速に進んだ都市化、農地の減少などにより、昔の面影はうすれつつあるというのが事実です。しかし、まだ市民に潤いをもたらしている場所も多く、また治水、防災機能によって大きく寄与しているのです。

二ヶ領本川は、二ヶ領用水の中・上流部にあり、旧三沢川を合流し橋本橋を経て、東に流下し、山下川、五反田川および二ヶ領用水(宿河原線)と合流したのち、高津区久地地先で平瀬川に流入している河川です。

流域は道路・鉄道等の利便性により、現在急速に全域にわたって都市化・宅地化が進み、首都圏のベッドタウンとなっています。過密化した都市の中であって、二ヶ領本川は、ほかでは代替できない連続した水と緑のオープンスペースとしての役割はますます大きくなっています。

将来的にも水と緑の快適環境の創造の一環として進められている「かわさき2010プラン」の中心的存在といえるのが二ヶ領本川の改修および整備です。歴史的・自然的・空間的資質を活用し、市民に憩いとうるおいをもたらす、川崎のシンボルとなるでしょう。

